

佐々木閑著

『インド仏教変移論』

なぜ仏教は多様化したのか

平岡 聡

1

本書は著者が佛教大学に提出した学位論文が土台になっているが、この学位論文はさらに著者が『仏教研究』に英文で発表してきた八編の論文に基づいている。学位論文が著書として出版されること自体は珍しいことではないが、しかし本書は様々な面で新しい。無論、研究者が研究の成果を世に問う時には、その研究内容が従来とは違った、何か新しいものでなければならぬのは当然であり、本書も仏教の多様化という問題に対して大胆な仮説を提示しているから、この点だけを取り上げてでも充分に新しく、評価に値するが、しかし本書は内容以外の点でも様々な新しさに目が惹かれる。まずその装丁に目を遣れば、学位論文とは思えない斬新なデザインが表紙に施され、箱入でもなく、値段も一万円を割っており、またタイトルも斬新で、従来の「この研究」とは違って、読者の興味をそそるものとなっているが、これは本書が仏教の専門家のみを対象とせず、一人でも多くの人に読んでもらいたいという著者の切なる

願いが形になって現れた結果と考えられる。

2

では内容の紹介に入ろう。インドに端を発し、ほぼアジアの全域を席卷するまでの宗教になった仏教は、他の宗教と比較すれば、極めて多彩なあり方を見せ、その多様化には驚かされる。特に東の終着点ともいえる日本仏教を始発のインド仏教と比較した場合、その差異には大きな隔たりを認めざるを得ないが、本書はこうした仏教の多様性、つまり新たな仏教が興ってはそれらが併存することをお互いに認めるといふ現象が何に由来するのかを客観的な論証によつて提示することを目的とし、そしてその由来を著者はアシヨーカー王時代の仏教のあり方に求めるのである。そしてこの問題は平川説の大乗仏教在家起源説によつてほぼ解決したかに見えた初期大乗仏教の発生にも絡んでくる重要なテーマとなる。ではまずその内容を概観すべく本書の目次（章名のみ）を紹介しよう。

序

第一章 研究方法

第二章 アシヨーカー王の分裂法勅

第三章 破僧定義の転換

第四章 『摩訶僧祇律』の構造

第五章 和合布薩と二種の破僧

第六章 仮説の提示

第七章 Dīpavaṃsa

結語

付論1 ノーマンへの再反論

付論2 大乘仏教在家起源説の問題点

本書の構成は推理小説にも似て、華麗な謎解きをしてみせる。まず序では本書が扱う最大の謎が提起される。それはすでに触れたように仏教の多様性という謎である。従来よりこれが問題にされる時には、その要因が仏教という宗教の寛容性によって説明されることが多かったが、佐々木が到った仮説は従来のステレオタイプのものとは全く違い、歴史的にその要因を説明しようと試みる。まず読者は序を読み終わった時点で、仏教の多様化という本書最大の謎と直面する（さらにそれに付随した小さな謎が各章において随時著者自身から読者に提示されるのも推理小説と同じ）。序に続いて第一章（研究方法）ではその謎を解くための研究方法が説明されるとともに、本書の全体の構成、つまり各章の関係が解説されており、ここを読めば本書が俯瞰できるようになっているが、ここでは佐々木がこの問題を扱うようになった契機や、またその問題をいかなる方法で解き明かしていくかという、いわば佐々木の研究の変遷が時を追って語られているので、ただ研究の成果を論理的に著述した従来の著書とは違い、佐々木がこの問題を研究するに際しての苦悩や困難の跡を読者に追体験させるといふ点でも、読者を飽きさせない構成になっている。

3

そもそも佐々木がこの問題を正面切って考察するに到ったきっかけは、アシヨーカ王碑文研究で名高いノーマンが京都で公演を行う際、当時佐々木の指導教官であった梶山雄一がノーマンに何か質問するよう佐々木に勧めたことであつたという。この時の質問自体は佐々木に直接的な利益をもたらさなかったが、しかし質問に備えてノーマンの研究や Schramm Edit. (SE) を丹念に読んでいたことがその後の佐々木の研究に意外な方向性を与えることになった。数ヶ月後、まだの□が記憶に鮮明に残っていた佐々木は『摩訶僧祇律』を読んでみると、その中の□と対応しそうな箇所を偶然発見する。そして□と『摩訶僧祇律』とを対応させて読むと、両者が相互補完的に有効に働き、それぞれの資料で読みの不明確であつた点が明確に理解できることを発見した。この経緯を纏めたのが第二章（アシヨーカ王の分裂法勅）である。ここでは碑文の読みに関する問題点が三つ挙げられているが、これらの疑問は□と対応する『摩訶僧祇律』巻二十六の記述の助けを借りれば、解決するという。さてアシヨーカ王碑文と部派分裂に関しては様々な説があるが、ベツヒェルトは□に現れる用語が律の専門用語であることに注目し、パリリ律の記述から、アシヨーカ王碑文でいわれている破僧は教義の相違による大規模な部派分裂を意味するのではなく、スケールの小さい地方僧団内での集団行事の執行を巡って生じる分裂であることを論証した。ノーマンも大筋でこ

の説を支持しているようであるが、佐々木はアショーカ王碑文が『摩訶僧祇律』巻二十六の中の部派分裂を描写する記述の一部と対応することから、アショーカ王碑文で言われる破僧はベツヒェルトの主張するような小規模なものではないとする一方で、ベツヒェルト説の妥当性も認めているが、この謎解は次章に持ち越される。

4

こうして従来全く誰も気づかなかった両資料の対応箇所を発見した佐々木は、この事実に基づいて考察を展開することに不安を覚える。つまりこの上に推論を積み重ねていった場合、もしその土台自体が崩れてしまったら、研究自体が崩壊してしまうからである。そこで佐々木は第二章の内容とは関連するが、全く違った論証を形成するようなテーマを模索し、その結果「破僧の定義」に着目した。関連資料を渉猟した佐々木は、ある時期に破僧の定義が変化している事実気づいたが、この変化がアショーカ王時代の仏教に起きた何らかの歴史的事件に関わっているとすれば、両者の接点が臆気ながら見えてくることになる。その際、研究方法に関して佐々木は一つの方針を定める。つまり最終的な仮説が構築されるまで、「アショーカ」結果「部派」といった語句を用いる文献資料は利用しない、というものである。ここで佐々木の念頭にあったのは、Dīpavaṃsa『大毘婆沙論』、『異部宗輪論』、Asokavadāna系の諸文献である。これらの資料には作者の意図が色濃く反映さ

れており、特にDīpavaṃsaや『大毘婆沙論』は自派の正統性を主張するために歴史的事実を改竄している可能性が高いので、客観的歴史事実を記録した情報源として用いるには危険であるという理由からである。

第二章の結論はしばらく脇に置き、律文献を中心に破僧定義の変化を考察したのが第三章（破僧定義の転換）である。これを明確に定義しているのは有部系の論書であり、破僧にはcakrabhedā (Cbh) と karmabhedā (Kbh) との二種があるという。Cbhとは「仏説に反する見解を主張して仲間を募り、独自のグループを形成すること」で、これに従えば意見の異なるグループが共存する事は不可能になる。一方Kbhは「一つの僧団内で別個に布薩などの僧団行事（羯磨）を行うこと」を意味し、この場合、教義の違いは問題にならない。つまり教義が違っていても、僧団行事を一緒に行っている限り破僧ではなく、従って教義の異なる者同士が共存することを可能にする。そして部派によってこの破僧の取り上げ方が違うというのである。即ち「十誦律」や根本有部律は一貫してCbhを、『摩訶僧祇律』は一貫してKbhを採用しており、『五分律』と『四分律』とパーリ律とは最初Cbhを採用していたが、何らかの事情で破僧定義がCbhに変更されたことを佐々木は資料的に裏付けている。

こうして有部以外の部派は破僧定義に関してCbhを採用したことになるが、その有部も阿毘達磨論書の作成期になってからこの動きに同調し、律の本文は変更することなく、「Cbhは

ブツダの教説に敵対してなされる破僧であるから、仏滅後に Cbh はあり得ず、起こりうるのは Kbh だけである」との口実を捏造することで、実質的に有部も Kbh を採用するに到ったが、有部がこのような破僧定義の変更を行なった時期に関しては、Cbh しか説かない『識身足論』から Kbh との二本立てを採用する『大毘婆沙論』との間であろうと推定している。また『摩訶僧祇律』が一貫して Kbh を採用している理由として、佐々木は三つの可能性を挙げる。

(1) 大衆部はもとも Kbh を採用していた。

(2) 大衆部には本来破僧の定義がなく、新たに Kbh という破僧定義を採用した。

(3) 『摩訶僧祇律』も本来は Cbh であったが、大衆部は破僧定義の変更にも熱心であったため、Cbh の痕跡が一掃された。

この謎解きも次章にお預けとなる。こうして広律文献を綿密に調査した佐々木は破僧に二種の異なった形があり、しかもそれが Cbh から Kbh へと時間的に移行していったことを本章で論証しているのである。

さて破僧の定義に二種があることが判明した今、ベツヒェルト説との齟齬を明らかにする状況が整った。先述の通りベツヒェルトはパーリ律の記述を手がかりに破僧を考察したのであるから、そこで目にする破僧は、Cbh の痕跡も残ってはいるが、「破僧に二種ある」ことを念頭に置いて読まない限り、当然 Kbh であり、従ってそこでの破僧は「スケールの小さい地方

僧団内での集団行事の執行を巡って生じる分裂」と結論づけざるを得ないわけである。しかしここでまたしても大きな謎に遭遇することになる。佐々木は『摩訶僧祇律』卷二十六の破僧の状況を Cbh としての部派分裂と捉えているが、しかし『摩訶僧祇律』の破僧定義が一貫して Kbh であるのに、アショーカ王碑文と対応する箇所にも Cbh としての破僧事件が説かれるのはなぜか。この謎も次章で明かされることになる。

5

さて第二章と第三章とはそれぞれ個別の論証であり、直接の関係はなかったが、この異なった二つの「点」は第四章（『摩訶僧祇律』の構造）を介し「線」として結ばれることになる。ここで佐々木は『摩訶僧祇律』健度部に見られる特異な構造の成立過程を説明し、その要因が破僧概念の転換にあったことを明らかにするが、これが第二章と第三章とを関連づける鍵となる。まず諸律を代表してパーリ律の章立てが、続いて『摩訶僧祇律』健度部の内容一覧が示されている。つまり両者の内容を比較することで、『摩訶僧祇律』健度部の特異性を明らかにしようというのである。両者の比較によって佐々木は次の三点を指摘する。

(1) 『摩訶僧祇律』跋渠法に含まれる雑多な記述のほとんどは、他の上座部系の諸律にもほぼ見いだすことができる。

(2) 『摩訶僧祇律』跋渠法の記述は一見脈絡なく並んでいるように見えるが、上座部系諸律の健度部に対応する章立

ても確かに存在する。

(3) 『摩訶僧祇律』跋渠法が上座部系の諸律と構造上で大きく食い違ってくる最大の理由は受戒法と布薩法の間雑多な規則が入り込んでいること、および本来受戒法に含まれるべき「和尚、阿闍梨、弟子の行動についての規定」、「沙弥に関する規定」が「薬法」の後に来ていることである。

この中で特に問題になるのが(3)である。つまり受戒法と布薩法とは上座部系の諸律においては健度部の第一番目と第二番目とに置かれる重要な健度部であるが、『摩訶僧祇律』ではこの間に雑多な規則が入り込み、フラウワルナーや平川も『摩訶僧祇律』跋渠法の特異性に関しては指摘しているものの、その理由に関しては明らかにしていない。そこで佐々木はこの謎解きを始めるが、まず詳細な文献学的考察から『摩訶僧祇律』改変の目的が羯磨の体系化であることを突き止め、その状況を次のように分析する。少し長くなるが、佐々木の流麗な謎解きの一部をここで味わってもらうために、原文を引用してみよう。

改変者は羯磨を集中的に解説しようという意図を持って改変に取りかかる。健度部の冒頭には受戒規則が説明されているが、これは僧団が行う白三羯磨の中でも重要なものであるから、これはこのままの形で置いておく。ところが、その受戒規則に付随して「和尚等の行動についての規定」「沙弥に関する規定」という長い記述があるが、これは羯磨に関係しない邪魔者だから取り除くことにする。さてそ

の後には「布薩法」「安居法」「自恣法」といった章が続いているが、これらも羯磨とは関係のない記述である。羯磨に関係するのは、それらの章よりずっとあとに来る Clampeyya-khandhaka、Kosamba-khandhaka などの懲罰羯磨を主題とする章である。そこでこれら羯磨関係の章を抜き出して「布薩法」の前に挿入する。その際、羯磨の一般規則が明示されるように、これらの章を再構成する。これで健度部の冒頭部分に羯磨関係の解説が集中して置かれたことになる。(中略) 残る問題は、先ほど受戒健度部から抜き出した「和尚、阿闍梨」や「沙弥」に関する二つの規則をどこに置くかということだが、一応主要な章が終わって、それからあとは雑多な規則が始まるという、その切れ目に置くのが適当である。そこで「薬法」が終わって「鉢法」が始まる、その隙間に挿入したのである。

この後、佐々木は改変の目的を次のように説明する。大衆部が羯磨即ち僧団行事の執行を集中的に解説するために『摩訶僧祇律』健度部を大幅に改変したという事実、そしてその改変部分の要となる箇所には対応する記述がきているという事実は、破僧概念が C_{DB} から K_{DB} へと転換されたのはまさにアシヨーカー時代の事件と関連していることを示している。つまりアシヨーカー時代に起こった何らかの C_{DB} の事件がその後の仏教僧団に C_{DB} という破僧定義を放棄させ、新たに K_{DB} という別の破僧定義を導入させたのではないかというのである。新しく採用された K_{DB} の定義は「布薩などの羯磨を一緒に行うことが和合

であり、別個に行うことが破僧」なのであるから、「羯磨とは何か」という疑問に答えておく必要がある、そのために『摩訶僧祇律』の編纂者は羯度部を大改造して羯磨の概念を明確にしたと佐々木は結論づけるのである。こう考えれば、『摩訶僧祇律』の破僧定義が一貫してC₂D₂であるのに、アシヨーカ王碑文と対応する箇所にもC₂D₂としての破僧事件が説かれる理由も解消するわけである。そしてまた『摩訶僧祇律』は本来上座部系の諸律と同じ構造を持ち、またその改変の理由が破僧定義の転換であったことから、『摩訶僧祇律』が一貫してC₂D₂を採用している理由としては、第三章で提示された三つの可能性のうち、(3)の可能性、即ち『摩訶僧祇律』も本来はC₂D₂を採用していたが、上座部系の諸律に比べて徹底した改変を行った結果、C₂D₂の痕跡が一掃されたことになる。

6

さて本書の結論は第六章であるが、そこに到るまでにはもう一つの論証、即ち和合布薩 (samagginuposatha) と破僧の関係が明らかにされなければならない。それが第五章にあたる。布薩に関する諸規定は布薩羯度において定められており、通常布薩は半月に一回の定期的な開催日以外に行ってはならないと規定されているが、僧団和合のための場合だけは例外だとされている。つまり僧団和合のためであればいつでも布薩を行うことができるわけだが、この和合布薩なるものがいかなる布薩なのかは広律文献の布薩羯度では具体的に説かれていないため、こ

の布薩は本来布薩の規定事項には含まれておらず、和合布薩をも含めた僧団再和合の手続きを規定したカウシャンバカ羯度において具体的に説かれていることから、カウシャンバカ羯度およびそこで説かれる和合布薩の成立は布薩羯度よりも遅いと佐々木は推定する。もしも布薩羯度が作られた時期に和合布薩が成立していたのであれば、当然和合布薩は布薩羯度において詳細に規定されていなければならないからである。さてこの和合布薩は破僧定義の変更とは関わりなく、一貫して用いられている和合の条件であるが、破僧定義転換後も、破僧解消の条件としてそのまま保持されたため、結果として破僧の開始条件と解消条件とに一貫性が生じることになった。しかし破僧定義変更の原因はこの条件の一致にあるのではなく、教義の違う者がその違いを認めつつ和合しなければならなかった何らかの歴史的事件であると佐々木は推定する。

7

これで仮説を提示する条件は総て出揃った。この結果を踏まえてアシヨーカ王時代の部派の状況を佐々木は次のように分析する。時代的に先行するC₂D₂が唯一の破僧定義であった時点では、教義を異にする者同士は互いに相手と共住しないばかりか相手の存在を否定していたであろう。そして敵対するグループが和解するためには和合布薩を行わなければならない。これにより分裂状態は解消されるが、しかし和合布薩そのものは教義の一本化までも規定しているわけではないから、和合布

薩によって和合したとしても各グループの異なる主張はそのまま保持されていることになり、これはまさに破僧の状況に立ち戻ってしまうことになる。和合布薩によって和合した各部派が各自の教義を保持しながらも破僧状態に陥ることを避けるためには「教義の違う者が共住しても破僧にはならない」ことを認める、新たな破僧の定義が必要になる。つまり敵対する者同士は和合布薩を通して和合するのであるから、それと対応して布薩儀式と一緒に行わないことを破僧であると定義すればよいのである。このように破僧定義を *Chh* から *Kh* に変更することにより、和合布薩後も教義の異なる者同士が共住し、なおかつ僧伽和合の状態を保持することができるようになったと佐々木は推定するのである。破僧定義の変換という視点から各部派を見た場合、この動きにもっとも積極的だったのは大衆部であり、和合の動きを支援したアシヨーカ側に立った。後に南方分別説部、法蔵部、化地部もこれに従ったが、説一切有部だけがアシヨーカに敵対する立場を取ったという構図が浮かび上がるのである。

佐々木自身が述べているように、本書の論証は根本分裂や枝末分裂に関しては何の情報も提供しないが、しかしアシヨーカ王時代の仏教界のあり方に関してはかなり具体的な状況を提示する。つまり、アシヨーカ王の時代にはすでに大衆部、南方分別説部、法蔵部、化地部、そして説一切有部の少なくとも五派が併存しており、そのような状況を憂いた優婆塞のアシヨーカは仏教僧団統一に力を貸した。その結果、説一切有部を除いた

各部派は破僧定義を変更することで、形式上僧伽を和合させることには成功したが、これは同時に異なる教義の並立を認める結果にもなったわけである。これに対する説一切有部の具体的な動向は不詳であるが、当初孤立していた説一切有部も後には *Kh* を採用しているのであるから、和合僧団の仲間に入ったことは確実であるという。

8

本書の核は第六章（仮説の提示）であるが、佐々木自身、仮説が提示されるまでは決して用いないと決めた資料が、第七章（*Dīpaṃsa*）と第八章（『阿毘達磨大毘婆沙論』と『舍利弗問経』）とで改めて考察の俎上に上る。つまり部派の正統性を色濃く反映した資料を、客観的な論証によって提示された第六章の仮説と照合させることで仮説との相違点が見いだせるとしたら、それはその部派の正統性を主張するために改竄された部分として認識され、さらにその改竄部分はその部派の正統性を裏付けることに役立っているとすれば、それは第六章で得られた仮説が歴史的事実である可能性を高めてくれることになるのである。つまりこの二つの章は別の角度から第六章の仮説を強化する目的を担っているのである。

さてこの二章で扱われる資料は個人の意見を反映している資料ではなく、部派を代表する意見として表された資料が望ましいが、まず第七章で取り上げられる *Dīpaṃsa* は南方分別説部の視点から著された年代記であり、しかも同様の歴史書

Mhāvamsa や Samantapāsādikā の序文等に比べてその成立が一番古いという理由で選ばれている。詳細な論証は本書に譲るが、いずれの章においても佐々木は第六章で想定した事件が実際に起こったとして、では各部派はその事件をどのように解釈し正当化していったかをあらかじめ予想した上で各資料の解説に入る。まず佐々木は第七章で Dīpavamsa に説かれたアシヨーカー時代の僧団分裂に関する部分の訳を挙げ、コンテキストの齟齬等に注目しながら幾つかの問題点を指摘し、これらの問題点が第六章の仮説を前提とすることによってどのように解釈できるかを提示する。その結果、南方分別説部は本来は破僧の定義変更に反対しており、外的圧力に屈してそれを受け入れた後も自分達の教義を厳格に守っていたいこうと努力した結果、Kathavatthu を作成し、第三結集を開催したのではないかと結論づける。

また第八章ではまず説一切有部を代表する論書『大毘婆沙論』が考察される。この資料を取り上げた理由としては、(1)所属部派が確定していること、(2)有部系資料の中で最古と想定できること、(3)アシヨーカー時代に起こった出来事が直接反映している可能性が高い、という三点を上げている。そして有部の立場を正当化する視点からアシヨーカー時代の事件を語るとすれば、「外道のグループがアシヨーカーと手を組んで何らかの悪説を主張し、正統仏教僧団である自分たちを迫害したが、自分たちはそれに屈することなく仏教を守った」という筋になるはずであると想定し、『大毘婆沙論』の根本分裂の記述を見ると、

大天の記述に関しては若干の問題が残るものの、この想定と極めて類似した状況が描かれていることから、『大毘婆沙論』の改変部分からも第六章の仮説が支持されたことになる。

最後に『舍利弗問經』であるが、佐々木はこの資料を大衆部の基本史書としての資料価値は疑問視しているが、現時点ではこれに代わる資料がないため、ここでは一応大衆部の文献としてこの資料を考察の対象にしている。そして前と同様に佐々木は大衆部の立場を「何らかの事件が起こり、大衆部はアシヨーカーの支援を受けて正統なる仏教の立場を守った。この時、南方分別説部などの多くの上座部も大衆部側につき、その結果仏教は一つの宗教世界として統一された。この動きに反対した一部の者（有部）は仏教世界から排除された」と想定して資料の検討に当たるが、『舍利弗問經』の場合、その内容に上座部系の伝承が混入していることから、前の二資料とは違って、必ずしも佐々木の想定した筋とはなっていないが、『舍利弗問經』が大衆部の資料であることが確定していない現状ではこのような結果も仕方ないといえよう。

9

さて以上で本論のすべてを紹介したので、最後に全体の構成を纏めておこう。まず第一章は本書の俯瞰図的役割を果たす。第二章と第三章とは個別の論証となるが、この二つが第四章によって結合し、また第五章の助けを借りて第六章の仮説へと導かれる。つまり第二章から第五章までは第六章の仮説を積み上

げ式で論証していくという婦納的な構成になっている。そして第七章と第八章とはその第六章の仮説に基づき、部派の正統性を色濃く反映した資料が部派の正統性を主張するためにどのような話を作り上げるかをあらかじめ想定し、実際の資料でその想定を確認するという演繹的な手法をとっているが、その想定が当たっている場合にはまたそれが婦納的に第六章の仮説を補強するという構成になっている。佐々木は本書を仕上げるに当たって、総ての情報を最終的に一つの学説に収束させる平川の研究を手本にし、その平川の手法を「エレガント」であると評しているが、このような本書の構成も平川に負けず劣らず「エレガント」である。

さて本書には二つの附論がある。まず一つ目はノーマンへの再反論である。これは『仏教研究』に佐々木が初めて載せた論文（本書の第二章に相当）に対してノーマンが反論を提出し、それに再び佐々木が反論した論文である。ここではノーマンが布薩に関して誤解していること、またその誤解が covering letter の読みを誤らせていること、『摩訶僧祇律』の矛盾した読みを無理に会通して解釈していることなど、様々な論理的論証を以てノーマンからの批判を一つ一つ丁寧に論駁しているが、何よりも問題なのは佐々木が第二・第三の論文を発表していた後にもかかわらず（しかも英文で）、ノーマンはそれに目を通さず、第一論文のみを対象に反論している点であり、彼の態度は極めて不誠実である。詳細は本書に譲るが、これに関して私見を述べておく。本書はノーマンのみならず、様々な研究者から

本研究に寄せられた反論に佐々木は研究者として常に誠実に答えている。たとえば破僧に関する佐々木の研究に反論したベツヒェルトの弟子ヒュスケンに対しても、第三章注⑦において再反論を試みているが、ここでのヒュスケンの反論は師匠のベヒェルト擁護を前提とする反論で、しかもノーマン同様、佐々木の後続の研究が発表されているにもかかわらず、第一論文のみを相手に反論した結果、彼女の批判的外れであることが指摘されている。そして最後に佐々木は「同じ律研究の輩として、今後でできるだけ風通しのよい協調関係が保てることを心より望んでいる」と結んでいる。

佐々木が研究で目指すものはあくまで歴史的事実であり、自己の権威づけであったり、師匠の擁護では決してない。つまり二人とも佐々木と同じ土俵で議論していかないのである。従ってもしも仮に佐々木と同じ土俵に立って彼の仮説に論理的に異を唱え、それが妥当であれば、佐々木はそれを受け入れることに躊躇しないであろう。ここに佐々木の研究者としての真理に対する謙虚な態度が伺えるのである。議論は喧嘩でも自己弁護の手段でもなく、まさに歴史的事実発掘に際しての建設的なダイアログでなければならぬことを本書は教えてくれるのである。同じ土俵に立った開かれた議論こそが真理到達の一番の近道ということ本書は暗示している（第二章注⑧や第六章注⑤なども参照されたい）。

また二つ目の附論は、大乘仏教の興起に関する、いわゆる平川説の問題点を指摘すると同時に、本書の仮説が平川説に代わ

つて新たに大乘仏教の興起に関する問題の鍵を握っていることを論証したものである。まず佐々木は平川説を支える四つの根拠を挙げ、そのいずれもが極めてあやふやな論証の上に成り立っていることを見せる。紙面の都合上、本書と関連する第四の根拠に絞って内容を紹介しよう。平川によれば、「教義を異にする者同士が同一僧団内に共住することは不可能であるから、小乗僧団の中から大乘が発生したと考えることはできない」という理由から、大乘仏教は仏塔を中心に生活していた在家者の集団から発生したことになるという結論を導くのであるが、すでに本書で明らかにされたように、「破僧定義の変更によって異なる教義を有する者同士でも僧団行事（羯磨）を一緒に行なっている限り、破僧にはならない」と破僧定義がアシヨカ王時代に変更されたとすれば、この平川の根拠は脆くも崩れ去ってしまう。こうして佐々木の確立した仮説は大乘仏教の興起という問題に新たな光を与えることになるわけである。

10

さて本書を読み終わった時点で痛感したのは、本書の全体を通底している「論理的明晰さ」である。本書の章立て自体が論理的に明快であることはすでに指摘したが、その他にも図示が多用され（私の計算では十四）、複雑な論理構造が図で示されることにより理解しやすくなっていること、また異なった説が紹介される時には、その両者の共通点や相違点のコントラストが鮮明にされている点などは読者にとって有り難い。また最初

にも指摘したように、何を問題とし、またいかなる方法でその問題を解決しようとしたか、つまり問題発見から問題解決までのプロセスが自らの体験に即して語られているので、特に若い研究者必読の書として推薦したい。

佐々木の研究はノーマンの質問に端を発し、仏教が多様化した要因を、アシヨカ王時代に起きたある特定の歴史的事件に求めるに到った。つまりアシヨカ王時代にはすでに僧団は分裂状態にあつたが、それを憂いた優婆塞のアシヨカ王が大衆部と力を合わせ、破僧定義を CB_{1} から CB_{2} に変換することにより、僧団和合を実現した。この経緯が CB_{1} と『摩訶僧祇律』との対応部分に垣間見られるのである。そして「教義の異なる者同士であつても、僧団行事（羯磨）を一緒に行なっている限り、破僧にはならない」という CB_{2} の破僧の定義を導入した時点で、形式的な僧団の和合には成功したが、その一方で異なる教義の併存を承認する形となり、事態は不可逆的に多様化せざるを得なかつたのではないか、というのが本書の論旨である。これにより、抽象的な議論のテーマとして取り上げられる傾向にあつた仏教多様化の問題を、純粹に歴史的な側面から考察することが可能であるという道を佐々木は本書で提示した。結論として「仏教とはいかなる宗教か」という問いにいつかは答えてみたいと将来の抱負を語っているが、佐々木はこの新たな謎解きに向かってもう始動しているかもしれない。

（二〇〇〇年十一月一〇日、大蔵出版、四一八頁、定価本書八〇〇〇円）